

# 高島藤樹会

(題字は、竹脇曇卿先生によるものです)



慢心と  
は、われこ  
そが、とい  
う我執の心  
であり、こ

発行

NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224  
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1  
藤樹書院・良知館内  
電話・FAX 0740(32)4156

「今一度、藤樹会の原点を」

小多 健裕

藤樹先生に次のようなことばがある。

すべての人間は、金銀珠玉よりも、なおすぐれた「明徳」というたからを、方寸のうちに賦与されて、この世に生をうけている。天は万物を生み育てる父母であるが、しかしその明徳は人間だけに与えられた。人間が万物の靈と呼ばれる所以は、じつにここにある、と。

ところが、昨今のテレビや新聞をにぎわしている事件を見ると、人間の良心はどこへいったかと首をかしげることばかりで、心温まるニュースはほとんど見当たらない。こうした現実社会と先生の教えとの違いがどうして起きのか。先生の答えはしそく明快である。われわれは、日常生活のなかで明徳を發揮せずに、曇らせている。その曇らせる原因は、「慢心」が暗雲のようにおわかれている事にある。その慢心を取り除かねば、ついにアクトのように溜まり、ついにはそのひとの心だけや言ひが異なるものになってしま

こには人を暖かく思いやる心など、さらさらない。この慢心の無い人間は稀だ、と先生は説く。二〇〇六年一月会報1号（創刊号）「ひじりの声」を敢えて掲載させて頂きました。

さて現在はどうでしようか。依然として、新聞やテレビで考えられない様な事件や、企業の責任者のお詫びの報道が絶えません。不登校やいじめ、フリーランスからニートへ、授業崩壊など、子ども達の多くが生き方に戸惑いを感じながら成人しているのが現状です。藤樹会の究極の目標である「致良知」「五事を正す」など、藤樹先生の教えを地域に如何に生かすかを念頭に、一昨年から映画「近江聖人中江藤樹」の上映会を市内各地で実施して来ました。しかし、市内での地域差はあるのは否めません。地域や市民、年齢を問わず、全ての市民が先生の教えや生き様から多くを学ぶ事が大切です。今一度、親と子、地域が先生の教えを思い起こして学び直しを心掛けてほしいと願っています。

現在、高島市の教育現場では、藤樹先生の教えを原点とした「高島の志の教育」を教育の重点とし、教育大綱に位置付けています。『子どもは地域の宝』を念頭に、市民の地域力の更なる向上を願っています。

慢心とは、われこそが、という我執の心であり、こ

ひじりの声  
上田藤市郎

この数か月、私学の小学校の建設、保育園、幼稚園教育に関する話題が、連日メディアに取り上げられた。文科省をはじめとして自治体も、教育といえば、子供たちの学力向上に躍起になっている。

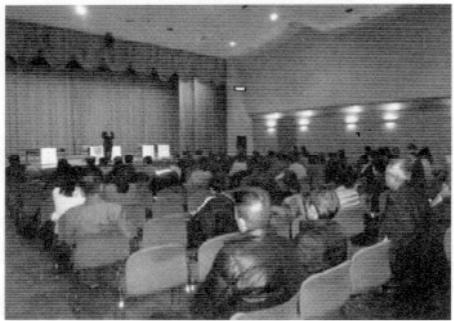
藤樹先生は、藤樹書院に掲げた「藤樹規」の中で、「学び」とは、多量の知識や技能の習得ではなくて、人としての「生きる姿勢」を身につけることだと述べておられる。総理大臣をはじめとして、官僚、与野党国會議員の答弁を聞いていると、人間は、自己保身のためにには、どのような言葉や行動をとつても、その場を切り抜けばいいという体である。無理が通れば、道理引つ込むが、世の中なのだと納得させられそうであ

しかし、この風潮に「ひじりの声」は、断じて納得しない。人の問いかけに誠意をもつて答える、言葉と行動を一致させて、誠実に生きるという「藤樹先生の志」を、政治に携わる者こそ堅持すべきではないのか。品性が問われているのである。世の中に嘘や偽物があふれ、正直者が馬鹿を見ることがあつても、只管、「致良知」この道を行く人間がいてもいいはずである。藤樹先生が、高島の地に残されたこの教えを誇りをもつて実践しよう。

## 中江藤樹・心のセミナー

「心のセミナー」は、広く市民の皆様に藤樹先生をもつと身近に知つていた

だきたい  
と願つて、  
一昨年か



朽木及び今津の各地域で順次開催してきました。

そして今年度は、二月十九日（日）の午後に安曇川公民館ふじのきホールにおいて二部構成で開催し、小学生からお年寄りまで約百二十名の方が来場されました。

第一部では、「映画『中江藤樹』制作物語」をテーマに、次の四名の方に対談をお願いしました。高橋志郎常務理事をコーディネーターとして、当映画製作の目的や経緯、苦労話や裏話などを真剣にかつ楽しく和

やかに語つていただきました。（次の肩書きは当時のものです。）

福井俊一氏（安曇川町長）

高見哲也氏（東映プロデューサー）

早藤甚五郎氏（安曇川町教委社会教育課長、映画制作実行委員会事務局）

中江 彰氏（中江藤樹記念館館長）

第二部は、

この映画制作にまつわるお話しを受けて、映

画『近江聖人・中江藤樹』を上映しました。鑑賞された皆様は、

『聖人』と称された藤樹先生の人となりや生き方・考え方改めて感動されたことと思います。



（事務局）



## 「よえもん君クリアーファイル」の作成と贈呈—立志祭にて—

えてファイルをお渡しいただいた理事さん、お世話様でした。

### 五事を正す

一、貌（ぼう）

なごやかな顔つきで

二、言（げん）

あたたかい言葉で

三、視（し）

やさしいまなざしで

四、聴（ちょう）

あいての話をよくきいて

五、思（し）

思いやりのある心で

### ※『立志祭』について

（市教育委員会の立志祭実施要項より）

「立志祭は明治四十一年頃から、青柳小学校を中心として実施されてきた歴史ある行事であり、藤樹先生の誕生日である三月七日に、子どもたちは九歳の頃の藤樹先生の思いを知り、今の自分を見つめ、自分の意志を持つための足がかりとしてきた。今もなお、藤樹先生の教えは、人々を敬い思いやりの心を育む人間形成にとって大切なものであり、その教えを学び、心を豊かにたくましく生きていこうとする高島の子どもの育成をねらいとして実施する。」



具体的には、三月七日前後に、市内全小学校で実施される『立志祭』（※）の場で、当会の理事または校長先生から、三年生全員にこのファイルを贈呈していただきました。当日「立志祭」に出向いて、「五事を正す」などについてのお話を添

その内容は学校によつて異なりますが、講話、「大学」唱和、「私の志」発表、藤樹紙芝居、藤樹カルタ大会、藤樹ロード探索、等々です。また、旧町村内で合同開催される所



## 「藤樹紙芝居」の紹介⑦ 『そばやのかんばん』

(解説) この話は、藤樹先生に関する伝え話(口碑伝説)の一つです。

先生は自ら「陰徳」の精神を実践し、村人たちにも夜講釈等で、「人に知られない善行の大切さ」を教えました。

隣村(現高島市鴨)のそばやから店の看板を頼まれた先生は、快く引き受け、忙しい中でしたが、練習をくり返し真心を込めて書き上げました。そばやは見事な字の看板を見て、喜んで持ち帰りました。ところが、その看板がたまたま通りかかった加賀の殿様の目にとまり、請われるままに簡単に譲り、再び先生に看板を頼みに行きました。

すると、先生は物静かに座敷に案内し、押し入れから半びつ(長櫛の半分の大きさの箱)を取りだし、中を見せました。何と櫛の中には、練習した看板の下書きが、びつしりつまっていたのです。それを見たそばやは、看板一枚のためにかけてもらった先生の時間や苦労、真心の大きさに気づいたのです。再び頼みに行かなければ、知らないままであったことでしょう。そばやは、先生の心のこもった看板を簡単に譲つたことに気づき、心から詫びました。

感性豊かな子どもたちは、どんなことに気づくのでしょうか。

(紙芝居)

① 大通りに新しいそばやができました。若いそばやの主人は、いい場所なので、よくはやるだろうと考えて建てました。ところが、思つていたようには、はやりません。

主人「人の通りが多いのに、うちの店には、お客様がなかなか来てくれないな。どうしてだろう。そ

うだ、知り合いのおじさんに、相談してみよう。あのおじさんなら、相談にのってくれるだろう。」



主人「おじさん、いい場所に店を建てたのに、あまりはやらないのです。何かよい工夫はないでしょうか。」

おじさん「一度、あんたの店に行つてみることにしましょう。」

おじさんは、そばやの店に来ました。

おじさん「そうだね。……それなら小川村の中江藤樹先生という方ですか。親切だし、字もうまいとひょうばんだよ。」

主人「そうですか。ありがとうございます。相談してよかつた。」

③ そばやの主人は喜んで、さつく藤樹先生の家に、かんばんをたのみに行きました。

主人「先生は、おいそがしい方だと思いましたが、新しくそばやを始めましたので、よくはやるよう

に、かんばんを書いてもらえないでしようか。」

先生「そうですか。上手には書けないかもしれませんのが、よくはやる店になるよう、手伝いができるの



た。

主人「どうですか。何か気づかれたら、教えてください。」

おじさん「かんばんがなくては、何の店か、わからないから、かんばんをかけなさい。」

主人「なるほど。わかりました。と

ころで、かんばんを書いてくれる、字が上手で、親切な人を教えてもらえませんか。」



なら、受けましょう。」そばやの主人は、安心して、帰りました。

④ 先生は、さつそく紙を出して、れんしゅうしてみました。しかし、思うような字は、なかなか書けません。次の日も、その次の日もれんしゅうしました。

先生 「かんたんに書けそうに思つたが、うまくかけないものだなあ。毎日続けることにしよう。」

⑤ そばやの主人は、たのみに行つてから、数日して、藤樹先生の家に行きました。



まつてもらえませんか。」

主人 「はい、わかりました。」

そばやの主人は、『先生は仕事でいそがしいから、書けないのだ。』

⑥ それから、十日ほどして、そば

やの主人は、また、先生の家に行きました。『それから、十日ほどして、そばやの主人は、また、先生の家に行きました。』



主人 「先生、かんばんは書いてもらいました。」

先生 「先生、かんばんは書いてもらえたでしょうか。」

主人 「先生、かんばんをかかえていました。両手で、かんばんをかかえていました。」

先生 「おまたせしました。この字で気にいつてもらえるかな。」

主人 「わあ、みごとな字ですね。さつそく、あしたから、使います。ありがとうございます。」

主人 「先生、かんばんを書いてもらえたでしょうか。」

すると、先生は、こう言いました。

先生 「そばやさん、もうしばらくく

先生 「お客様が、たくさん来てくれるといいですね。」

そばやの主人は、喜んでかんばんを大切にかかえて、帰りました。

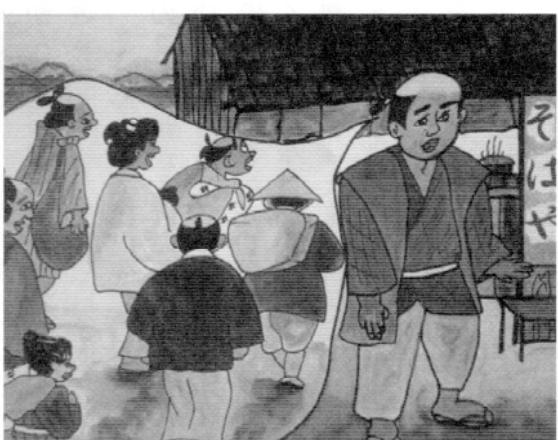
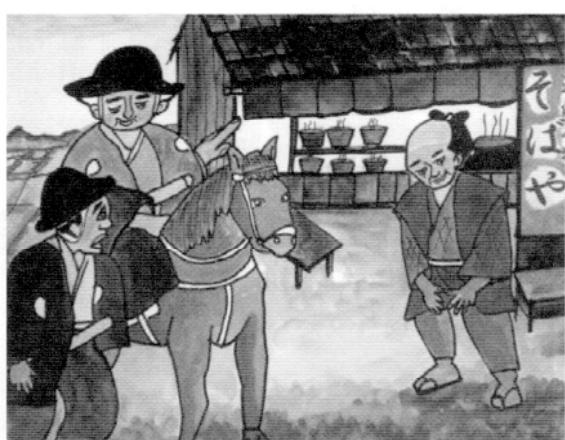
⑦ 次の日、そばやの主人は、朝早く起きて、すぐに、かんばんをかけました。店の前の大通りから、ながめてみました。みごとな字で書かれたかんばんのおかげで、店が引き立ちました。

主人 「このかんばんがあると、『そばや』ということが、よくわかるし、また、上手な字だから、目立つぞ。」

知り合いのおじさんが言つたとおり、『そばや』の字が、よく目立つようになつたので、店のお客さんがふえました。



⑧ ある日のことです。りつぱなみなりのおさむらいが、馬に乗つて大通りを通りかかりました。加賀のとのさまと、そのけらいです。



**殿様** 「それ、あのかんばんを見よ。みごとな字で書いてあるぞ。あの店で、いつぶくすることにしようではないか。」

**けらい** 「はい、おとのさま。ちょうど昼夜でござりますな。」

**そばやは** りっぱなみなりのさむらいが、加賀のとのさまだと知り、たいそうおどろきました。そして、かんばんをかけて、ほんとうに良かつたと思いました。

⑨ **そばや**の主人に、こんなことを言いました。

**殿様** 「おいしいそばであつたぞ。」

⑩ **そばや**の主人に、こんなことを言いました。

**主人** 「ありがとうございます。ほめここへ寄つてよかったです。」

**主人** 「ありがとうございます。ほめもう一度かんばんを書いてもらうため、先生の家に行きました。」

**主人** 「先生、すみませんが、もう一度かんばんを書いていただけませんか。」

**先生** 「何か、ぐあいのわるいことが、あつたのですか。」

たずねられた主人は、そのわけをにこにこしながら、話しました。

**主人** 「それで、おとのさまは、たいそう喜んで、私にたくさんのお金をくださいました。」

**先生** 「ほう、それは良かつたですね。」

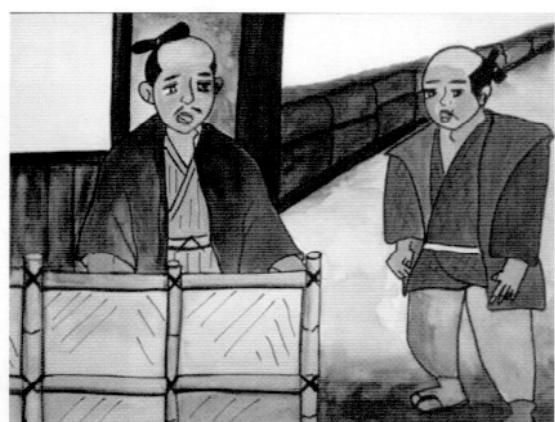
**主人** 「そこで、もう一度、先生にかんばんを書いていただきたいので、ね。」

**殿様** 「ところで、この店のかんばんは、みごとな字で書いてあるな。すまんが、あれをゆずつてくれないか。礼は、とらすぞ。」

たのまれた主人は、びっくりしました。そして、ちょっとどうしようかと、まよいました。しかし、『そうだ、もう一度、先生にお願いして、書いてもらえばいいか』と、考えました。

**主人** 「はい、おとのさま。おゆずりしましよう。」

そう答えると、とのさまは、たいさんのお金をお礼として、わたしました。



⑪ **そばや**の主人は、何を見せてくしました。

**先生** 「おまえさんに、見せたいと思うのにまいりました。」

**先生** 「そうですか……。ちょっと、こちらに来てごらんなさい。おまえさんにみせたいものが、ありますよ。」

そう言って、おしいれの方に案内しました。



は、そば屋のかんばんを書くために練習した字が、いっぱいつまつていたのです。

**主人** 「先生は、こんなにもたくさん練習をして、あんなみごとなかんばんを書いてくださったのか」と、気づきました。

そばやの主人は、先生のまごころのこもつたかんばんを、かんたんにゆずつてしまつたこと、お札をもらつて喜んでいた自分を、はずかしく思い、先生に心からおわびを言いました。  
(おしまい)

次回⑧は、「うそはつけぬ」の紙芝居をご紹介します。お楽しみにしてください。

大洲に生きる藤樹先生

三田村治夫



# 藤樹像と先生にまつわる碑—大洲偏一

さて、ここでは、今回  
の旅で目にした「藤樹  
像」と「藤樹先生にまつ  
わる碑」を中心に紹介し  
ます。

過日、三十年ぶりに大洲市を訪れる機会を得ました。バスで市内に入つていくと、新たに整備された大洲城、高速道、立ち並ぶ量販店などがかつての記憶をますます不確かなものにし、初めて足を踏み入れる土地であるかのような新鮮さを覚えました。

治四十三年十月に建立、大正十四年六月に改鑄、さらに昭和二十七年十一月に再建といった歴史があり、原型制作は、塩崎宇宙氏によります。左はその台座の碑文です。

左手には、藤樹先生生誕四百年を記念して設置された「孝」の石碑が

近江聖人 中江藤樹先生（1608～1648）

先生の名は原、通称は与右衛門、生家は近江の小川村（滋賀県）屋敷内に大きな藤の木が生い茂り、その下で学問を積み、敬い集まる人々を導いたので、藤樹先生と呼ばれ、後の世の人々からは近江聖人と敬慕されてきた。

大洲は、先生が10歳から27歳まで過ごされた立志・感恩・勉学の地である。大洲の人々は、先生ゆかりの地として、その学徳を追慕し、藤樹先生の心をいつまでも継承しようと、この城山に銅像を建立した。

※教えー「孝」「致良知」「慎独」「知行合一」など

\*著書一「翁問答」「鑑草」「春風」「捷徑医案」など

平成9年11月1日記 大洲藤樹会

藤樹先生贊  
内外瑩徹八面玲瓏  
千古聖德萬衆知崇  
大洲藤樹會總裁  
舊大洲藩主正三位子爵加藤泰秋書  
また、その台座の前には、藤樹先生を紹介した石碑がありました。

A black and white photograph of a man with a shaved head, wearing traditional Chinese robes. He is seated and looking slightly to his left. The background is dark and indistinct.

ました。昭和三十五年、当校創立十周年を記念して築かれた天心園（和風庭園）の正面中央に藤樹青年像（塩崎宇宙氏作）がありました。

一思大情空中  
萬象全福皆歸樂  
想到古恩滿於心  
此身方當極直境

奥に進むと庭園の邸跡が広がり、藤樹先生の旧邸は、昭和十四年に

忍の字に題す 中江藤樹  
一たび忍べば七情皆中和す  
再び忍べば五福皆ならびいたる  
忍んで百忍に至れば満腔の春  
ききたる宇宙すべて真境

至徳堂の前庭には、昭和三十三年藤樹先生誕三百五十年記念に建立された二石からなる「孝碑」があります。その右の石には銅板レリーフの藤樹像が、また左の石には『孝』の文字及びその辞解が彫られています。

た銅板がめ込まれています。

なお、今

### 第三〇回 記念館小企画展開催中

**館長 富永 雄教**

現在、当記念館では、「藤樹心学を広めた人たち」をテーマに小企画展を開催しております。

中江藤樹は、中国明代の陽明学者の王陽明の思想に共感したこと、日本陽明学の祖とも言われていますが、「孝行」や「致良知」、「五事

を正す」、「知行合一」などを主な教えとする深遠なる「藤樹心学（良知心学）」という独自の思想を確立していました。そして、その過程で、百人余りの門人を抱えるようになりました。

三人目は、渾岡山で、藤樹に四年間師事し、藤樹の没後、西陣に藤樹の祠堂を建てて、学館を創設し、藤樹心学の普及に努めました。岡山の門人は数百人を数え、京都や会津、大阪、美作、伊勢、江戸、熊本に学派ができるなど、藤樹学は全国に広がりました。

四人目は、蕃山の甥である岡田季誠で、常省に学び、藤樹の遺文や遺品などを収集することを志しました。また、長年月を要して「藤樹先生全書」を編纂し、これは、その後、藤樹やその思想を学ぼうとする後人のための有用な資料となっています。

そのほか、三輪執齋、佐藤一齋、大塩平八郎、村井弦齋、國府種徳なども、藤樹心学の広がりに関連して資料を展示しています。

ご協力ありがとうございます。

### 賛助会員一覧

- ウエストレイクホテル可以登樓
- 株式会社 大山建設
- 株式会社 桑原組
- 有限会社 宏和商事
- 税理士法人・小畠会計事務所
- 有限会社 白浜荘
- 社会福祉法人 新旭みのり会
- ソエダ 株式会社
- 株式会社 TADコーポレーション
- 鉄屋商事 株式会社
- 株式会社 戸井薬局
- とも栄 藤樹街道本店
- 中村印刷 株式会社
- 株式会社 中村測量設計
- ニッケイ工業 株式会社
- 八田建設 株式会社
- 有限会社 馬場塗装
- 三田村印刷 株式会社
- 有限会社 綿庄食品店
- (五十音順)

### あとがき

「高島の心」にも藤樹先生が：

表情が穏やかで、バタバタした動きがなく、ゆっくり時間が流れ、素直で礼儀正しい子どもたち：大洲の人々である。一方、藤本太郎兵衛、高島玄俊、松本彦平、清水安三等々の偉人はもとより、高島人の心にも、きっと藤樹先生の教えが受け継がれてきていると信じる。

(H・M)



回は見学で行きなかつたのですが、大洲小学校の校庭には、藤樹少年像があるとのことで、大洲高校の校庭はゴミ一つ、草一本なく、草二階の窓から、視線の合った高校生が笑みと会話を迎えてくれました。すれ違ふ小学生も、気持ちよくあいさつをしてくれます。大洲城のパンフレットには、「藩政に寄与した三人の家人」のトップに「中江藤樹」が掲げられています。天守が再建される前、その位置にあって、城下を見守っていたのが『藤樹像』だったそうです。

大洲の人々の心には、今もなお藤樹先生が生きておられるのであります。



藤樹心学が全国に広まるために、藤樹心学を体認した後、備前岡